

その事業幅の広さから、経産省、農水省の両省から支援を受けています。

市役所としても、従来の縦割りシステムのなかでこの構想を推進することは困難として、提案者のサイクスと協調

して、新しい行政モデルの構築に挑戦しているものと感じています。私とチーム責任者の真鍋企画経済部長とは良い意味での柔軟な連携プレーを行っています。

私が本原稿を執筆しているこの時期、食通会の活動は、



▶タイの企業に愛媛産品のPRを行う視察団一行 (右から3番目が大久保副団長)

いよてつ高島屋で開催(11月24日〜26日)された「西条の観光と特産品フェア」が終わり、愛媛県の特産品輸出をめざして、タイ国へ視察団が発(11月27日〜12月1日)したところです。

前者の担当責任者である杉森哲史さんは、野菜ソムリエの資格を持つ31歳、後者の世話役で副団長として総勢13名の視察団を引率して元気よく出発した大久保武さんは29歳です。両名ともサイクスを始めとする民間力と市役所との横断的な協力を得て、立派に責務遂行してくれています。

この2つのプロジェクトは食通会が取り組んでいる18のプロジェクトの一部であり、食通会では、すべてのプロジ



▲タイ訪問の成果を市長に報告する視察団



▲特産品フェアで野菜の説明をする杉森さん

エクトに市役所のメンバーを担当責任者として選任しています。また、昨年4月から大阪に常駐し、関西圏に西条市を積極的にPRしている辻中健史さん(31歳)も食通会の出身です。年齢や職位を超えて大いに実力を発揮し頑張っている姿は、新しい時代の市行政の活力を感じさせます。

■今後の食通会の活動

前述のとおり、現状だけでも18のプロジェクトが同時並行的に行われています。

今後の活動の主なものとしては、12月13日に西条市総合文化会館で行われる「四国食品健康フォーラム」(担当責任者は濱田学さん)や1月に開催が予定されている「総合食料産業技術懇談会」(担当

責任者は越智一之さん)があります。

この二つのプロジェクトは「食」、「農」等の研究者ネットワークの拠点を西条市に形成することを目標にしています。また、本年4月に開館を予定している「食の創造館」(JR壬生川駅前の旧産業学習館)での事業は、地域再生計画の認定事業(担当責任者は近藤孝弘さん)としても位置付けられており、ここを舞台とする「食」についての諸事業(担当責任者は越智三義さん)が次々と計画されています。



▲四国食品健康フォーラムでの濱田さん(左)

■構想はジグソーパズル方式で推進

この様に、ヤレルことから

着実に実行していけば、新しいヤレルことができてくる。ヤラネバナライイことも見えてくる。そして、それに挑戦していくという方法で目標を追求して行く。私はこの方法を「ジグソーパズル方式」と呼んでいます。

最終目標さえ正しければ、ヤレルことからやっていく、そして目標に近づけば、それまでの過程でヤッタことから何かが生まれてくる。見えてきたヤラネバナライイことをヤリトゲルこととして挑戦していくのです。

行政としては大胆に見えるこの方法も民間では当たり前の手法です。西条市役所としても、今の激しい多様化、変動化、不透明化のなかで、新しいプロジェクト手法として挑戦していこうとしている訳です。

最後に、食通会から随分話は大きくなりますが、今を生きている私たちには、子孫に対してできるだけのことを行う責任があると思います。この四国から、愛媛県から、西条市からベストプレーをしていこうではありませんか。